

本山考古室と紅野芳雄「考古小録」

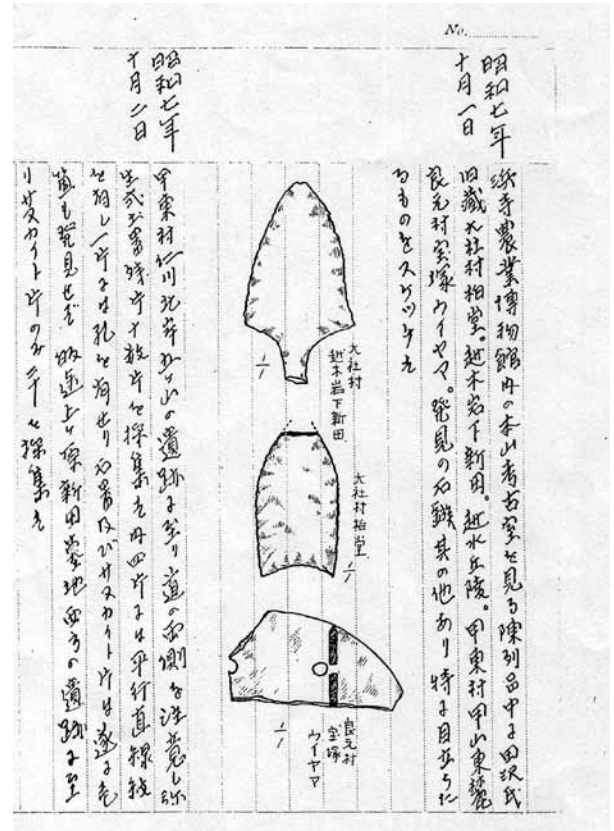
合 田 茂 伸

兵庫県西宮市の指定有形文化財に考古資料「考古小録及び関係品（306点）」がある。指定は平成22年5月12日である。紅野芳雄は『考古小録』の著者である。指定文化財となっている「関係品」の大部分は、氏が採集した石器である。指定対象のうちわけは、稿本「考古小録」第1冊、第2冊、第3冊、稿本「考古図譜」、稿本「考古雑録」、刊本『考古小録』、日記（3点）、採集遺物357点である。



稿本「考古小録」（全3冊）

紅野芳雄は、西宮町長に就いた紅野太郎の長男として明治26年西宮に生まれ、明治44年茨木中学校を卒業し、浪速銀行西宮支店に勤務した後、大正8年から昭和13年まで家業である酒造業の経営にあたった。なお、浪速銀行は、第三十二国立銀行が明治31年に私立銀行として営業した銀行で、浪速銀行と改称後大正9年に十五銀行に合併されるまで続いた。芳雄が、銀行勤務や家業を営みながら、大正6年から昭和13年まで、遺跡踏査活動や、考古学に関する覚え書きなどを連綿と記録し続けたノートが「考古小録」全3冊である。このノートを、紅野芳雄、吉井良尚、田澤金吾らが興した後一時中断していた西宮史談会を昭和15年に復活するに際して、田岡香逸らが中心となって一冊の本にまとめたものが、『紅野芳雄遺著 考古小録』である。



「考古小録」（昭和7年10月1日）

紅野芳雄は、遺跡の踏査や遺物の採集とその記録に情熱を傾けたが、各地の博物館や博覧会を見学したり、所属した西宮史談会主催の考古博覧会や武庫地方郷土史料展覧会などへ所蔵品の出品をしたりもしている。

大正6年に宝塚新温泉で開かれた宮川氏所蔵加茂遺跡発見石器土器の展覧会、大正8年11月30日奈良帝室博物館、大正9年2月12日、同日東京帝室博物館、昭和7年10月1日濱寺農業博物館内の本山考古室の見学などにおいて、多くの遺物のスケッチを残している。本山考古室の遺物は、いうまでもなく、現関西大学博物館の核コレクションである「本山考古資料」へと引き継がれたものである。

「昭和7年10月1日 浜寺農業博物館内の本山考古室を見る 陳列品中の田沢氏旧蔵大社村

柏堂。越木岩下新田。越水丘陵。甲東村甲山東麓良元村宝塚ウイヤマ。発見の石鏃其の他あり

特に目立ちたるものをスケッチす」と記して、大社村越木岩下新田の石鏃、大社村柏堂の石鏃、良元村宝塚ウイヤマの石庖丁(?)をスケッチしている、いずれも1/1とある。このうち、越木岩下新田出土石鏃が、現在の関西大学博物館に伝蔵されており、紅野芳雄のスケッチした石鏃と同定することができる。陳列はどのような状況であったのかはわからないが、一目で同定できるほど石器の特徴を捉えており、独学ではあったろうが、石器の特徴を抽象化して捉えることができる程度に、遺物の観察とスケッチの技量を有している。また、文中の田沢氏は、田澤金吾氏のことで、辰馬悦蔵氏や氏を通じて梅原末治氏との交流があり、梅原氏の『銅鐸の研究』に資料を提供したり、田澤氏の採集した遺物の多くが現京都大学総合博物館に伝蔵されたりしている。

紅野芳雄ら当時の好古家は、田澤金吾氏ら同好家や古物商との間で、石器や土器、埴輪の交換、売買をよく行っており、「考古小録」にもその記録が見える。

この本山考古室の石鏃と紅野芳雄のスケッチが残された「考古小録」第3冊は、平成10年に開催された西宮市立郷土資料館第13回特別展示において同じ展示ケースに並べられ、実に66年ぶりの再開を果たした。

「考古小録」に記された紅野芳雄と本山考古室の接触や田澤金吾氏との度重なる交友は、大正から昭和初期における「考古」あるいは「好古」のありかたをリアルに伝えてくれている。

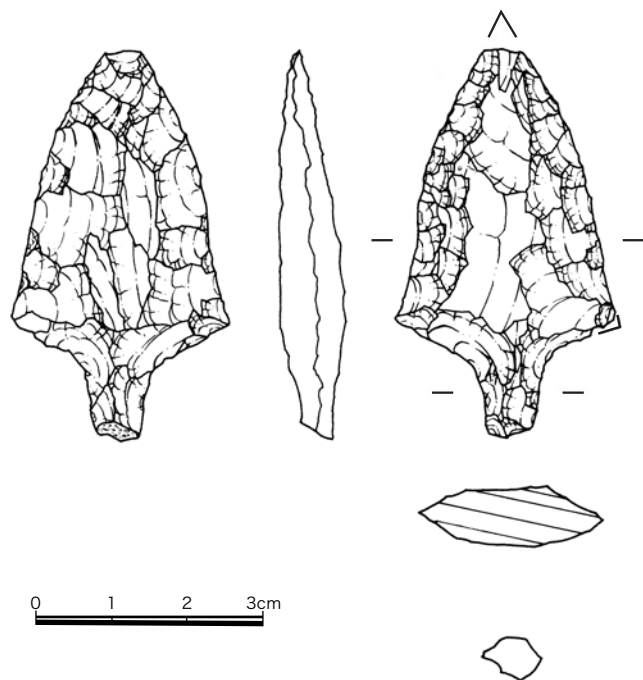
なお、「考古小録及び関係品」は、平成10年の西宮市立郷土資料館特別展示ののち、紅野芳雄のご遺族より一括して西宮市立郷土資料館に寄贈された。

参考文献

- 末永雅雄編 1935年『本山考古室要録』
- 紅野芳雄 1940年『考古小録』
- 合田茂伸 1998年『紅野芳雄「考古小録」～西宮考古学のパイオニア～西宮市立郷土資料館第13回特別展示案内図録～』（西宮市立郷土資料館）
- 森下真企 2017年『西宮市指定重要有形文化財〈考古資料〉「考古小録」及び関係品調査報告書』（西宮市文化財資料第64号）



石鏃（大社村越木岩下新田）



石鏃実測図（実測・トレース：渡邊貴亮氏）

関西大学非常勤講師
西宮市立郷土資料館 館長